

特集にあたって

新潟リハビリテーション大学

倉智 雅子

コミュニケーション障害に携わる臨床家のなかには、「論文を書こう」と声をかけられると、「自分には関係ない」と感じてしまう人が少なからず存在するのではないだろうか。それは、『論文』という言葉が多少なりとも高尚な響きをもち、堅苦しさや面倒な作業を連想させてしまうからかもしれない。一般的に論文は、自分の主張を客観的なデータをもとに読者に伝えるもの、研究成果を世に報告するものを指すため、研究者の仕事と思われがちである。しかし、論文とは、実は臨床家にとって大変身近な存在といえる。

たとえば、論文を読む側に立って考えてみよう。ある障害に対する訓練手技を臨床現場で選ぼうとして、その有効性に関する「書かれた情報」が欲しいと思ったことはないだろうか。この「書かれた情報」こそが、論文である。「より良い支援」を患者様に提供したいとの良心や熱意をもつ臨床家は、必然的に科学的な根拠を求める。つまり論文は、より良き臨床家を目指す者には不可欠な存在であり、頻繁にお世話になる拠り所といっても過言ではない。ならば、誰かの役に立つ情報をもっている臨床家は、それを論文にして世の人と分かち合うべきで、その行為は結果的に社会への貢献、ひいてはお世話になった先達への恩返しにつながる。

とはいえ、書く立場に立ったときには論文書きのハードルは高く感じられるものである。「学会発表なら良いけれ

ど、書くのは大変だし、文になってしまったものには責任が伴うし……」と敬遠している人も多かもしれない。しかし、責任ある形にするからこそ、正式な発表として世の中に受け入れられてもらえるのであって、残念ながら、学会発表だけではその仕事は完成したことになる。せっかく学会発表までこぎつけたのであれば、発表者にはもうひと頑張りしてぜひとも形に残してもらいたい。大変な作業ではあるが、論文書きに費やした時間とエネルギーは決して無駄にはならず、医療分野への貢献のほか、業績、知識、経験、達成感など、有形・無形に自らに返ってくることも強調しておきたい。

学術論文には原著以外に短報や症例報告も含まれるため、自分の経験や学術的環境に合った種類の論文に取り組むことができる。実験や大がかりなデータ収集をしなくても、日々の臨床を真摯に丁寧に記録することが質の高い論文につながることもある。論文執筆経験者や向上心旺盛な方には、基礎研究や臨床研究といった原著論文に挑戦し、査読者から厳しい意見をもらいながら、権威ある学術誌への投稿や英語論文の執筆などを目標に掲げてほしいと思う。一方で、論文初心者には、まずは書けそうな種類の論文から「やってみる」ことをお勧めしたい。行動に移すことが自らの成長につながるので、本特集が初心者の背中を押す一助となれば望外の喜びである。